

◆ 世界遺産委員会日本政府代表団の稲葉信子さんに聞く ◆

「イコモス(ユネスコ諮問機関) 勧告について」

「武家の古都・鎌倉」のユネスコへの推薦書作成委員であり、筑波大学大学院世界文化遺産学専攻教授(元文化庁文化財調査官)の稲葉信子さんに、イコモス勧告直後の5月2日に緊急インタビューを行い、イコモス勧告について伺いました。要旨をお伝えします。

鎌倉のイコモス勧告「不記載」について

鎌倉については価値の捉え方と対応する構成資産の範囲について、富士山と比べて説明が難しいと感じていました。それだけに、イコモス内でもいろいろ意見が分かれるかも知れないという心配がありました。

日本のように丁寧に時間をかけて推薦書を作成し、「不記載」という結果に対して多分敏感に反応するであろう国に対して、割とあっさり結論が出されたと感じています。毎年、イコモスから「不記載」と勧告を受けるものはたくさんあります。しかし、そうした努力を行ってきた日本に対して「不記載」がどういうインパクトを与えるかということをもう少し考えれば、事前の質疑応答の可能性など、いろいろ方法はあったのではないかと思います。

イコモス審査の内実

実際に審査をする人を「デスクレビュー」といいます。専門家に推薦書を送って、それぞれが結果を書いて送り返します。彼らは総合的に価値の審査をして決めます。イコモスの現地調査では価値の審査はせず、保存状態の審査を行います。

勧告のいきさつ

推薦書の中で、日本史上における鎌倉政権の重要性、それが日本史に及ぼした影響は世界遺産として十分に価値があるということは、証明されていると思います。しかし抽象的な歴史的価値があることは認めても、それを証明する実態が伴わないと世界遺産としては認められません。鎌倉の準備を進めたときから行政も含めて、われわれ専門家は最初からそこが課題であると認識していました。

鎌倉に金閣寺、銀閣寺、清水寺のような寺や鎌倉五山が完璧に残っていれば、それはそれで意味はあったのですが、建長寺も鶴岡八幡宮も基本的には当時のものがあまり残っていません。また、来た方々に点として存在する寺や神社を見せてもやはり全貌はわからないというのが、国際専門家会議等で来られた専門家

の方々の印象でした。

山稜部の導入

鎌倉時代というものをどうやって語るのか。イコモスの結果を見ても鎌倉時代という歴史上の価値はないとは言っていない。鎌倉時代を語る強い物証があれば、それで押していけるはずでした。その物証とは迫力があるので、点の集合体ではありません。国際専門家会議で航空写真を見ている中で、「物量があるものは山だよね」という意見が出ました。山は一番面積が広いので、これで鎌倉の町を語ることにしようということになりました。

推薦書では、そうやって点でバラバラになっているものをつなぐため何とか面として、しっかりした物証があるということを出して表現しようとしたのですが、イコモス勧告では山の中にある点も寺と神社でしかないと言われてしまいました。鎌倉という町に世界遺産に足る歴史的価値があるとするなら、それを私たちは山というバスケットで表現しようとしたわけで、その努力は買って欲しかったと思います。

市民の役割

引き続き世界遺産リストへの登録をめざすということであるなら、ここでこそ地元の結束が必要になります。鎌倉市民が行政に対して、これからも登録に向けて頑張っしてほしいという要望を出すかどうかということになるのではないのでしょうか。登録をめざす過程で、今のコンセプトのまま一本道を歩むのか、それとも新しいコンセプトを練り直すのか、その選択を迫られることになるでしょう。

また、今後の世界遺産登録の動きと並行して鎌倉のまちづくりを考える上で、新たな開発をどう規制していくのかということは考えなくてはなりません。より重要なのはまちづくりの方で、登録のための戦略とは別のものとみなすべきです。

世界の動向

最近は富士山のように分かりやすい遺産ばかりではなくなってきて、鎌倉と同様に不記載の勧告を受ける遺産が、先進国・開発途上国を問わず、世界中で増えてきています。ところが世界遺産が世界的にも政治的なインパクトを持つようになると、地元は地元なりに努力をします。鎌倉も平泉も同じでした。何年も予算をかけて、努力をしてきた結果が、わずか1年の審査ではねられてしまう。こうした決裂した不幸な状態を避けたいと世界遺産委員国が思い始めている状況です。